

長岡京の大歌所

● 高橋 六二

えっ、長岡京の企画展!? という思いだった。これまで古代の宮都跡はそれぞれに幾度となく訪れてきた。しかし長岡京ばかりは機会がなかった。というよりもあまり意識することがないものだった。それで国立歴史民俗博物館の「長岡京遷都—桓武と激動の時代」展があると知って意外だったのである。

平成19 (2007) 年10月13日、この展示を観ていてさらに驚いた。平城京から平安京への橋渡し的な宮都としか考えていなかった長岡京が、桓武天皇の延暦3 (784) 年から延暦13 (794) 年のわずか10年間に、実

に古代日本を激変させることまでなしてしまった、と印象づけるほどの展示だったからである。

なかでも私を震撼させたのは「大歌所」という墨書土器が展示されていたことである。実は私は、若き日に「大歌と大歌所」という論文を書いていた（「跡見学園短期大学紀要」第9集 昭和47年3月刊）。そこでは大歌所の成立を上限は天平八 (736)、九年、下限は天応元 (781) 年と考えてみておいた。それからすれば長岡京に大歌所があってもおかしくはないことになる。その証拠を目の前で、突然に、しかも実物で見

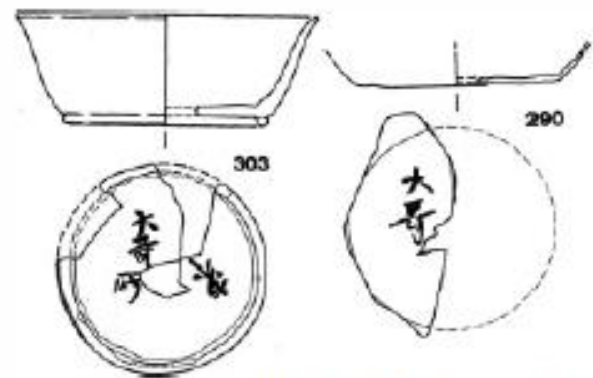
せられようとは、思ってもいなかったのである。

早く長岡京跡を見なければ、という思いは平成21(2009)年9月15日、漸く実現できた。まず向日市文化資料館(京都府向日市)を訪れ、常設展示で長岡京の概況をたっぷりと知ることができた。そして中島信親氏の御厚意で、『向日市埋蔵文化財調査報告書 第45集 鶏冠井遺跡』

(向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 平成9年12月28日刊)を手にすることができた。

それによれば「大歌所」の墨書土器(報告No.303)は口径17.4cm・器高6.45cm・底径11.2cmの、供膳形態の須恵器杯で、底部外面に墨書されている。出土したのは向日市鶏冠井町七反田14-1で実施した左京第218次調査時(1989年4月17日~6月27日)である。そこは長岡京左京二条二坊十四町の宅地東方、二条条間大路と東二坊大路の交差点付近に相当する。そこの側溝に放棄されたと考えられているこの墨書土器の出土は、大歌所が長岡京期にすでに成立していた可能性を示し、「雅楽寮の移転、大歌所の成立、及び宮外官衙町形成の問題にとって重要な資料になると思われる。」と指摘されている。なお「東」は方角と扱われているが、なにを意味するかは述べら

れていない。



『向日市埋蔵文化財調査報告書 第45集 鶏冠井遺跡』による

ところでもう一つ、同所のやや離れた地点から出土した関連の墨書土器があったのである。「大歌」と書かれたもの(報告No.290)である。やはり須恵器杯で、残存する半分ほどの底部外面に墨書がある。しかし、これが「大歌所」ではなく「大歌」とのみあるのはなにを意味するのか。残る半面に「所」があるのか、「大歌所」の略記なのか、それ以外の意味を持つのか否か、まったく不明である。

いずれにしても長岡京で大歌や大歌所はどのようにあったのか。『続日本紀』『類聚国史』にはこれについての記事はないから、具体的なことはわからない。そうした中でこの二つの墨書土器の存在をどのように位置づけたらよいのか。

大歌所の成立を考えるときに古来引用される雅楽寮は、長岡京にもあ

った。延暦6年2月の任官記事に橘朝臣安麻呂が雅楽助に、延暦8年12月の皇太后高野新笠の御葬司に雅楽助息長真人浄継がおり、延暦10年正月の任官記事に紀朝臣登麻理が雅楽頭に任じられているからである。それまでの雅楽頭は文室真人波多麻呂が延暦2年6月以降、つまり平城京から引き続いて務めていた。しかし雅楽寮の活動内容を具体的に示した記事はやはりない。大歌所はそこに隠れていたのだろうか。

ところでこの二つの墨書土器の出土した西方の宅地は、國下多美樹氏「長岡京—伝統と変革の都城」(吉村・山路編『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店 2007年3月刊)の図8には「推定雅楽寮関連宮司」とある。この墨書土器の出土を踏まえての推定なのかと思われるが、詳細は確かめていない。

長岡京の大歌・大歌所の実態がこれ以上にわからない現状からすると、一つの方法として前後の資料を検討してみるのも無駄ではないかもしれない。

(天応元年11月)己巳(15日)、五位已上を宴して、雅楽寮の楽と大歌とを庭につかへまつ奏らしむ。

(新日本古典文学大系『続日本紀』五)

桓武天皇の大嘗祭の記事である。

大歌や大歌所を考えるときにはよく使う資料である。旧稿で大歌所の成立の下限とする根拠としたものである。

(延暦)十四年春正月庚午朔。廢朝。以_レ大極殿未_レ成也。宴_レ侍臣於前殿。奏_レ大歌及雜樂。宴畢賜_レ被。

(新訂増補国史大系5『類聚国史』)

前年10月22日に新京(平安京)に遷都したが、大極殿が未完成のために朝賀をとりやめ、前殿で侍臣に宴を賜ったときの記事である。

これらの用例からすれば、「大歌」という語は長岡京の前後を通じてすでに定着していたといつてよいのだろう。旧稿では触れ得なかったが、近年の大歌研究は正倉院の資料によって天平勝宝4(752)年4月9日の東大寺大仏開眼供養のときの事例、あるいは平城宮出土の木簡の記録をもふまえた論究が見られるようになった。喜ばしいことである。

長岡京出土の「大哥」という墨書土器は、こうした研究の流れの中に新しい刺激を与えてくれることになる。また「大哥所」という墨書土器の場合は、これまで不確かだった大歌所の成立時期を、少なくとも長岡京の時代にはあったことを明らかにしてくれた。ただ気がかりなのは、

この二つの土器の墨書は、長岡京でなされたのか、それとも平城京でだったのか、ということである。細かいようだが、それは大歌所の成立時期の確定に関わることだからである。

いわばこの新資料に触れた論考

を、不幸にしてまだ目にしていない。そのためにきわめて個人的な経緯を述べたに過ぎないが、35年余りを空白のままに過ごしたあとに、こんな貴重な資料にめぐりあえたことを幸せに思う。